

日本語フレームネットの 構文アノテーション

小原京子
(慶應義塾大学)



日本語フレームネット

1. はじめに

- 文全体の意味記述＝フレームアノテーション＋構文アノテーション
 - フレームアノテーション
係り受け関係(叙述、補文、修飾など)にある言語形式間の意味記述
 - 「**構文**」(言語形式＋その意味)に関するアノテーション
- 構文アノテーション
 - 英語・日本語・スウェーデン語・ポルトガル語などで近年開始
 - フレームアノテーションとの対応についての議論はまだほぼ皆無
- 論文の主旨
 - 日本語構文とフレームとの対応関係を、その構文がフレームを喚起するかに基づき分類
 - 日本語に新たな構文タイプが存在

2. 構文アノテーション

- 構文文法 (Construction Grammar)
「慣習化された解釈手続きを付与された構造＝構文 (construction)」の集合体としての文法
- 構文データベース (Constructicon)
 - 構文のリスト
 - 各構文の定義
 - 各構文の例文へのアノテーション
- 構文アノテーション
 - 構文の構造体を構成する要素 (Construct Element, CE)
 - 構文を喚起する要素 (Construction-Evoking Element, CEE)
- **不均衡比較構文**
 - 存在1と存在2の間の、ある特徴に関するスケール上の不均衡性について
 - CE: 存在1, 存在2, 特徴
 - (1') { [存在1 話しことばの方が] [存在2 書きことば] [CEE より] [特徴 半歩先を行っている] }
- **「V-ている」構文**
 - 動詞に助動詞「ている」がついて特定の相を表す
 - CE: 動詞
 - (2'c) 洗濯物はもう { [動詞 乾い] [CEE ている] }
- **出典構文**
 - 他から聞いたことの出どころや判断のよりどころを表す (グループジャマシイ 1998: 458)。
 - CE: 出典
 - (3') { [出典 白状させた] [CEE ところによると] }
昔の恋人の名前だったらしい。

3. 構文とフレームとの対応関係

3.1 フレームを喚起する構文

- **不均衡比較構文**
 - 不均衡比較フレーム(存在が特定の**特徴**についてある**基準**と比較されることに関する背景知識)を喚起
 - (1'') { [存在 話しことば(の方)が] [基準=FEE 書きことば] [より] } [特徴 半歩時代の先を行っている]

3.2 フレームを喚起しない構文

3.2.1 合成性原理により解釈が可能な構文

- **修飾語句-主要部構文**

- CE: 修飾語句, 主要部
- (4) { [修飾語句 美しい] [主要部 花] }

3.2.2 条件によって解釈が異なる構文

- **「V-ている」構文**

- CE: 動詞
- (状態動詞＋「ている」＝状態相)
- (2'a) 母と娘はよく { [動詞-状態 似] [CEE ている] }
- (継続動詞＋「ている」＝進行相)
- (2'b) 子供たちが { [動詞-継続 走つ] [CEE ている] }
- (到達・達成動詞＋「ている」＝完了相)
- (2'c) 洗濯物はもう { [動詞-到達 乾い] [CEE ている] }

3.2.3 空所が関与する構文

- **空所化構文**

- CE: 項目1, 項目2
- (5) { [項目1 おじいさんは] [項目2 山へ], [項目1 おばあさんは] [項目2 川へ] } [行つた] }

- **「て」接続構文**

- (Hasegawa 1996)
- 「時間的に前後する2事象の記述では、両方の等位節の主語は同一の動作主を指さねばならない」
- a. #私が会場に着いて講演が始まった。
- b. 講師が会場に着いて講演が始まった。
 - CE: 等位項1, 等位項2,
 - (6) { [等位項1 講師が会場に着い] [CEE て] [等位項2 講演が始まった] }。

4. 考察

- Lyngfelt et al. (2013)
 - 構文からフレームへの対応が、明白か、一対多か、対応が全くないか、で分類
- Fillmore et al. (2012)
 - フレームを喚起しない構文を認める立場
 - ⇒ フレームを喚起しない構文を3つに分類
- 本論文
 - ⇒ 日本語には、第4の、フレームを喚起しない構文タイプがある

5. おわりに

- 構文アノテーションとフレームアノテーションとの対応
- **<意味制約がフレームでは表現できない> 構文タイプの存在**
- 「意味を持たない」構文を認めるかについての論争 (cf. Fillmore et al. 2012, Goldberg 2006) に、日本語の立場から貢献